

日曜寺子屋家族塾の取り組み 1

古川 秀明

きっかけ

公立の小中学校でスクールカウンセラーを始めて17年になる。

その間たくさん家族面接をしてきた。一番多いのは不登校や非行の相談。その中で「勉強」のことがよく話題になった。

不登校や非行で学校に行かないと勉強が遅れ、進学にも影響が出る。不登校の子には、外に出られない子も多いので塾にも行かない。かといって家庭教師も拒否する。通信講座も手付かずのままお金だけ取られる。

子どもが中学3年の受験生なら、なおさら親は焦る。我が家はあまりお金もないので、できれば学費の安い公立へ行っただけがいい。しかし、不登校や非行で内申点も付かず、今の状態では偏差値を上げるどころか、偏差値の測定さえままならない。そんな状態なのに子どもは全く勉強しようとしなない。

このままでは将来が不安だ。大学を出ても就職難の時代に、高校進学さえも危ぶまれる我が子はいったいどうなるのか……。

不登校や非行の他に、小学校の低学年からチックや腹痛などの神経症症状を訴える子どもの相談も多い。

家族や友達の問題もあるのだが、案外多いのが「勉強」だ。有名私立中学へ入れるべく奮闘する親と、それに必死で応える子ども。睡眠時間以外はほとんど勉強。そんな親御さんの望みは、「勉強時間

は削らずにチックだけ治して欲しい……」。

このように、勉強させたいという親の押し付けを、子どもは様々な症状で抵抗する。症状はどうあれ、勉強を拒否する子ども達が、一発で親を黙らせるセリフがある。

それは、「なんで勉強せなあかんの？」である。子どもにこれを言われると、たいがいの親は一瞬黙る。

しかし、親も負けていない。すぐに様々なパターンで反撃に出る。

パターン1 <お受験ドミノ倒し攻撃>

「ええか、よう聞きや。今勉強しといたらええ中学校に入れるねん。そこでもがんばったらええ高校に入れるねん。そこでもがんばったらええ大学に入れて、ええ会社に入れて、あんたは幸せになれるんやで」

パターン2 <愛情押し付け攻撃>

「あんたのために言うてるんやで、あんたが将来困らんように今勉強せなあかんねん。あんたのことを思うて言うてることやねんで。こんなにあんたを思っているお母ちゃんの気持ち、いっぺんお腹切って見せてあげたいわ」

パターン3 <比較攻撃>

「A君は～中学を目指してはるんやで。あんたA君に負けてもええのんか？」

「B君のお兄ちゃんは高校も行かんと引きこもってはるらしいで。あんたもそんななりたいか？」

「お父ちゃんみたいに安い給料でもええのんか！」

「弟より成績悪いやん。あんたお兄ちゃんとして恥ずかしいんか！」

パターン4 <世間体攻撃>

「ええか、大きい声では言えへんけどな、なんやかんや言うても、世間の人には学歴を見るんやで。就職するときも、雇い主はまず履歴書の学歴を見るんや。中学卒業の人と大学卒業の人がいたら、絶対大学卒業してる人が選ばれるんやで」

「口ではみんな学歴なんかどうでもええて言うてるけど、ほんまはしょうもない学校しか出てない人をバカにしてはんねんで」

パターン5 <突き放し攻撃>

「もうええ！もうわかった！そんなに勉強したくなかったら勝手にしよし。もう今日からあんたの世話なんかせえへん！あんたのご飯も作らへんしな！」

パターン6 <褒め殺し攻撃>

「ほんまにあんたはお母ちゃんの宝物や。あんたがいるからお母ちゃん生きてるようなもんやで。あんたやったら絶対あの中学入れるから。大丈夫や。お母ちゃんがついてるよ」

パターン7 <泣き脅し攻撃>

「うわ〜ん、うわ〜ん、うわ〜ん」

パターン8 <鬱病攻撃>

「もうええよ。みんなお母ちゃんが悪いねん。もうお母ちゃんなんか生きてる値打ちなんかないねん。死んだほうがええねん。今までごめんな。お母ちゃんが死んだらもう勉強でうるさくいう人はいいひんから……。 (今にも死にそうなか細い声で) ちょっとそこの心療内科でもらったお薬取って〜」

パターン9 <収賄攻撃>

「もしあんたががんばってあの学校入れたら、あんたが欲しがってるスマホ買うたげるから……。ウィーでもプレステでも買うたげるから……」

パターン10 <家出攻撃>

「お母ちゃんはおんたが勉強するようになるまで家には帰りません。探さないで下さい。行き先は東尋坊方面です」(東尋坊……自殺の名所)

パターン11 <虐待攻撃>

「こんな問題もわからへんのか！(バシッ)」

「お前はアホか！何回ゆうたら覚えるんや！(バコッ)」

「何でこの前教えたこと忘れるんや！(バシッ)」→顔をしばかれて鼻血を出す

「なに鼻血出しとるんじゃ(ボコッ)」

「通告されるから誰にも言うなよ！(髪の毛を引っ張る)」

パターン12 <お金に換算攻撃>

「あんなに高い月謝払って塾行かせてこんな成績かいなほんまに！あほらしいわ。金返して欲しいわ」

「何が（公文にいくもん）や！（公文なんかに行くもんか）！や」

「あ〜、高い月謝払って家庭教師頼んでのにこの成績か！、月謝をドブに捨てたんと同じやな」

パターン13 <知り合い動員攻撃>

「お前、もうちょっとお母ちゃんの気持ちわかったれよ。おっちゃんはお前のお母ちゃんの苦勞がようわかんねん」

「おばちゃん悲しいわ……。あなたのお母ちゃんがどんなにあんたのこと可愛がってはるか、おばちゃんよう知ってんねん。そやし、おばちゃんのためにもがんばって勉強して！」

パターン14 <問答無用攻撃>

「じゃかましい！ええから黙って勉強しなさい！」

パターン15 <長時間偉人伝攻撃>

「昔、二ノ宮金次郎てゆう人がいてな……（延々30分）」

+

「中国の偉い人に孔子てゆう人がいてな……（延々30分）」

+

「野口英世とゆう人は小さい時にやけどしていじめられても……（延々30分）」

パターン16 <自分の苦勞攻撃>

「お父ちゃんは子どもの時貧乏で、高校行きたかったけど行けへんかったんや。それから学歴で苦勞してなあ……。そやからお前にはどうしても大学まで行って欲しいんや」

これらの攻撃は単独で使われる場合もあれば、いくつかを組み合わせられて使われる場合もある。

これらはほんの一例にすぎない。他にも子どもに勉強させるための攻撃方法がたくさんある。恐らく勉強をさせようとする親の数と同じ数だけあるだろう。

これらの親の勉強攻撃に、子ども達はどこかしらけている。小学校の低学年までは親の強制力が機能する。しかし、年齢を重ねるにつれ、また、親の押し付けが激しくなるにつれ、「なんで勉強せなあかんの？」の一言は光を放ち、勉強させようとする親のわき腹に一瞬のボディークローを加える。

それは何故なのだろう……。

（続く……）

